

## 「またあした」 ～Sさんとわたしたち～

秦野精華園 支援2課  
工藤 蘭

### 1.はじめに

私は去年(令和3年度)18歳でかながわ共同会へ就職し、Sさんのように自閉傾向が強く、確認行動が多い人に初めて出会った。夜間は確認することが多く、日課を調整できる課長との基本的な確認でも夜間約2時間程度かかる。他の職員との確認時は更に細かく確認するため、もっと時間がかかっている。この確認を私たちは毎晩行っている。

初めての夜勤時に私が感じた不安や、確認行動が多く、言葉での表現が苦手なSさんと新人だった私がどのように過ごしてきたかを伝えたい。

### 2.Sさんについて

#### (1)Sさんがいる場所

Sさんが生活する秦野精華園支援2課は東に15名の男性(あじさい寮)西に15名の女性(なでしこ寮)が生活している。平均年齢は40歳くらいで支援区分は5、6の方が中心であり、決まった手順やルールをもつ方が生活している。言葉でのコミュニケーションが主である方は半数もいない。

日中の主な過ごし場所は総務課内に設けられたSさんの場所である。以前は課内や活動場所で過ごしていたが、他利用者から時に出る本人の大声を批判されたり、他利用者からの過干渉などを受け、課内で過ごすことが本人にとってつらくなってしまった経緯がある。

Sさんの現在の主な過ごし場所は総務課で、総務課内にSさんの過ごせる場所があり、このことを全園的に周知し、支援の協力を得ている。以前の園長が秦野精華園の総務部長だったころから「園は利用者さんの住まい、どこで過ごすかは利用者さんの自由」と受け入れてもらい、今に至っている。



写真:総務課職員と和気あいあいとした雰囲気のSさん

## 令和4年度 体験交流セミナー②

### (2) Sさんのストレングス

私が思う S さんの魅力は、寄り添ってくれる優しさや気遣いができるところである。まだ入職した間もないころ、夜勤時にある利用者に首元を掴まれることや、頬を叩かれることがあり、そんな経験がなかった私は、ひどく落ち込んでいた。その夜、ふだんは職員が夜勤業務に取り掛かるよりも自身の確認作業を優先したい S さんが、静かに私の心が落ち着くまで声を掛けず、ただこちらを見て待っていてくれた。私が落ち着いて夜勤業務に取り掛かったあとの確認では、いつもより静かな声で職員を呼び、気にかけてくれている様子を見て心が救われた。その他者を思いやる力は S さんの才能だと思うと先輩職員も言っている。これは、ほんの一例に過ぎない。他にも、S さんのストレングスはたくさんあり、嬉しさの表現、新人研修が苦手(配慮する)、言葉をいっぱい知っている、職員のひととなりを見抜くのが上手い、法人事務局へも顔パスで出入りする等が挙げられる。これからも様々なストレングスを見つけ支援していきたい。

### (3) Sさんの成育歴

S さんは 3 歳頃より多動で、高い所から飛び降りるなどの行動が見られ、このころより服薬を始めるも、目が離せなかったようだ。幼少期は 2 か所の児童施設を経て成人施設へ入所するも、月に一度臀部への筋肉注射が必要なほど、入所中利用者や職員を押しことや叩くなどの行動が見られていたようだ。

秦野精華園に入所したのは平成 23 年だが、やはりうまく意図が伝わらないと近くにいる人を押しことや、大きな声を出すことがあったと聞いている。

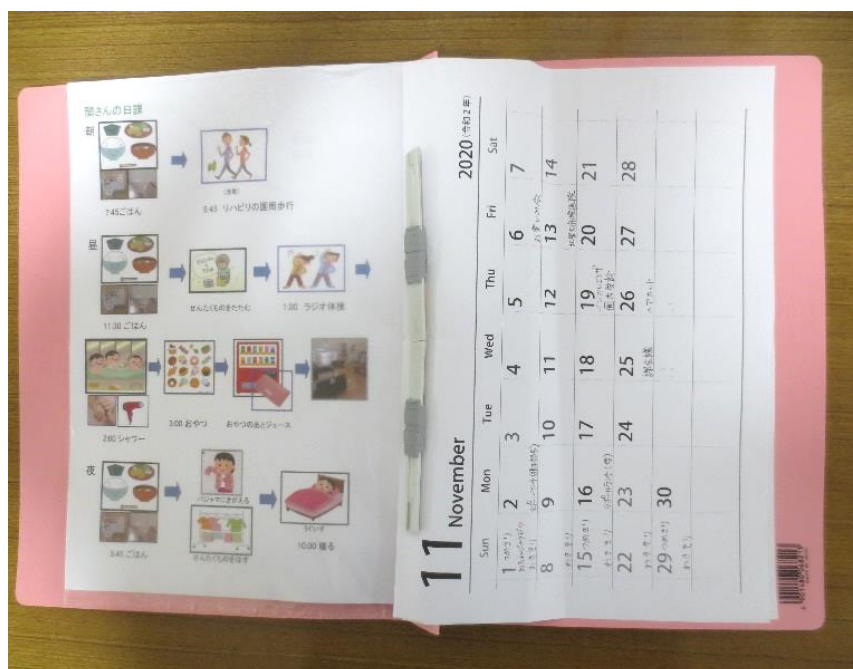
大きな変化が起こったのは、令和元年に卵巣嚢腫がみつきり病院で定期的に受診、初めての手術を受ける事になったことから、様々な支援の工夫を始めたことからである。

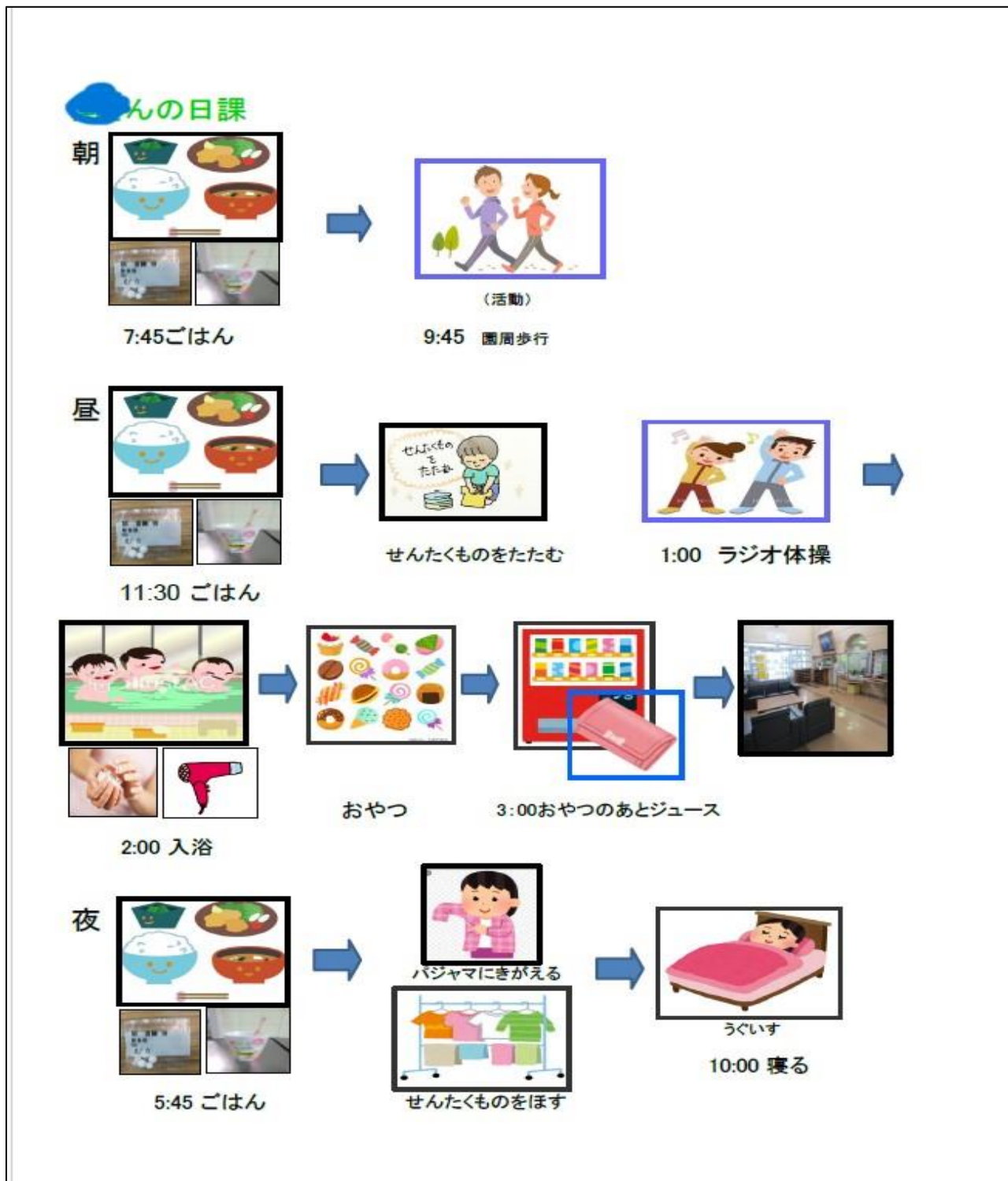
## 3.変化のきっかけ

### (1) ツールの利用

受診、手術をとおして医療職と入院のあいだお願いする付き添いヘルパーと当時の支援 2 課での共通のツールが必要となったことと、また病院での過ごし方についてイラストや写真を用いて日課の提示を行なうために作成した。

本人への説明をする際にイラストを用いたところ、スムーズに理解し手術までの検査や通院も理解できたことから導入したとのことだった。現在は通院日の日課、爪切りの日の日課と日課ごとに作成している。このことに習って日々の日課も同じように提示したことで、今現在の支援(本人用日課ファイルの活用)に至っている。今では、本人への大切な情報伝達のツールとして活用している。





(2) 環境変化

Sさんはカレンダーやカレンダーになりうる様式すべてを確認したいとの希望がある。以前の生活課ではカレンダーや日課確認ボードなどが多くあり、たくさんの『確認』に溢れていたようだ。平成30年～令和元年にかけて秦野精華園の修繕整備を行なうための大規模な工事が行われた。それに伴い、都度課全体での引っ越しを6回行った。その時に引っ越しを行なうというマイナスに思える要因を『環境変化チャンス』と捉え、引っ越しの度にカレンダーや確認ボードを減らして来た。そのため現在は、Sさんだけでなく他利用者や、職員が予定を確認するボードが主な確認場所となっている。

#### 4. Sさんの支援で私が工夫したこと

Sさんの支援をしていて不安に思ったことを伝えたい。私が一番不安だと感じたのは、先輩職員の付き添いで2回勤務をしたのち、初めて独りで夜勤を行なった時である。始めは、何が伝えたいのか分からず、Sさんの言いたいことと、私が言っていることが違うと大きな声を出して訴えがある他、伝わらないもどかしさからか職員を押すなどが見られた。夜勤時には、女性職員は一人のため、何を伝えたいかが分からないと、確認を終えることが出来ないことから非常に苦慮した。

工夫したことは大きく二つある。1つ目は、Sさんに伝える協力をしてもらった点である。Sさんは普段、ジェスチャーや「あー」や、「おー」などの言葉を用いて、自分の伝えたいことを話している。確認を行う際にも、指をさす、言葉を発する等で、職員に言って欲しいことなどを伝えているが、時にそれでは分からない時もあり、その際には対応に苦慮する。その時には、「分からないから確認できない」と伝えると大きな声を出し、自分の言いたいことを知ってほしい・わかってほしいと訴えがある。伝えたいことがわからない時には、Sさんにそれでは分からないことから、ヒントやもっと詳しく教えて欲しいとわかりやすく伝えている。するとSさんは、そのものに関連する場所や、もの、ジェスチャー等を用いて、自分の言いたいことを的確に相手に伝えることができる。

例えば、「〇日に体重測定がしたい」と職員に伝えたいとする。Sさんはそれを伝えるために、支援員室から食堂方面を指差す。それだけではわからないことを伝えると、一緒についてきてほしいとジェスチャーを行ない、支援室入り口で頭を下げ、付いてくるように促し、体重計がある場所まで案内し、自分の伝えたいことを話す。他にも、〇日にケーキや、特別なおやつを食べたいと伝えたい時には、支援員室棚にあるイベント用のフォークを職員の側に持ってきて、「あー」と、これがしたい、これが食べたいと希望し職員へ伝えている。ここで最も重要なことは、わからないからできないではなく、わからないことをわからないと伝え、教えてもらう事、自分も知りたい・理解したいと思う気持ちを持ち利用者さん一人ひとりと向き合うことである。

2つ目は、Sさんは干渉されることを好まないため、できるだけこちらからして欲しいことを促すのではなく、Sさんが行動を起こすのを待ち、支援を行なっている点である。基本的に行動や手順は決まっている。時に私は、次に確認するであろうことを勧めることがある。だが、Sさんは勧められるほど確認が遅くなる。当たり前ではあるが、本人のタイミングを待たないと納得いく確認を行うことは出来ない。そのため、Sさんのペースに合わせた支援が必要となる。



写真:職員と一緒にカレンダーの確認をするSさん

## 5. これから

今年2年目の職員となり、Sさんの担当になった時は正直驚いた。私はSさんが少しでも生活しやすく、健康的で楽しく暮らせるように、支援の手助けができればと思い支援に取り組んだ。毎月変わるカレンダーの予定を本人と一緒に作成することで、Sさんとの信頼関係や、本人の一番納得できる方法を模索している。模索していくことで1年目と違い、Sさんの新しい一面を発見することがある。Sさんの伝える努力を受けて、職員も理解する努力を心がけることが大切だと教えてもらった。これからも利用者から教えてもらうことを忘れず、色々な方に寄り添い支援を行なっていきたい。